

世界旅打ち気分

●第51回・廃止されたミュールの競馬場

須田鷹雄



窓口が混んでいるわりに
売り上げはない……



賞金は安いがレースは熱い



パドック兼装鞍所に集まるファン

<https://www.instagram.com/sudatatakaoshoten/>

前号ではオックスフィールド競馬についてじっくり書いたが、今回も特殊な競馬場について書かせていただきたい。この競馬場はもう廃止になっているし、日本人で訪れたのは筆者だけかも知れないくらいアーラな開催である。昨年出した「世界の中心で馬に賭ける」という本にも書いたのだがお読みでない方のほうが多いだろうし、この機会に改めて書き残しておきたい。

その競馬場とは、アメリカ・ネバダ州にあつたウィネマッカ競馬場である。といっても、普通の競馬場ではない。年に1週・2日間しか開催しない競馬場で、しかもミュール(ラバ)のレースのみが行われていた。

ネバダ州というとラスベガスを想起する方が多いだろうが、ラスベガスは州の南側、こちらは北側にあってかなり離れている。都会と呼べる最寄りの都市はこれもカジノ都市として知られるリノで、そこから車で3時間ほど走ったところにウィネマッカの町がある。

そのウイネマッカで、かつて6月はじめに「ミュール祭り」のようなイベントが行われていた。ミュールとはロバが父・馬が母となる交雑

となる休み明けだった。

結果は6頭立て4番人気の馬が勝つ波乱だったが、同馬の血統を見ると母の父がダンシングオーキヤンヌ。これはクォーターホースの大競走馬にして大種牡馬なので、ミュールの母もそれなりの血統ではあるようだ。

予選と決勝がきちんと行われたのは、3歳馬による「フェーチュリティ」。土曜に6頭立てと5頭立てで予選が行われたが、全馬そこがデビューウー戦。ミュールの初出走馬なんてどう評価していいのか分からぬが、両方とも1番人気が勝つたので地元民や関係者の間では前評判が出回っているのだろう。日曜のフェーチュリティ本番もトライアルの勝ち馬2頭で決まった。

そんなに力量差があるならば、フェーチュリティは馬連一点か馬単2点で勝負できるのでは、と思うかもしれない。しかし、馬券発売の規模を聞いて驚くなれば、フェーチュリティを例に取ると、馬連の発売総額は265ドル、馬単は54ドルしかないのだ。2ドル札を突っ込むだけでもオッズが変わってしまう。さらにこのフェーチュリティ、3着

には最低人気馬が入って3連単は的中者がいなかつた。その結果、「2↓4↓3着以外の馬」を持ついた人は全員的中という扱いに。しかも馬単が8.6倍なのにこちらは12.2倍。3連単も23.1ドルしか赔率がないので、オッズの整合性など成り立つようがない。

ちなみに賞金は、フェーチュリティが総額5000ドル、ダービーが2500ドルだがいちばん安いレースは900ドル。賞金 자체はめちゃめちゃ安いが、その賞金ですら馬券の売り上げで支えられない。なぜそこまで売り上げがないか

といふと、ネットはおろか場外発売も一切なく、現場でしか馬券を買えないからだ。そもそも地元民が遊びで数ドル買う程度、おそらく2010年は筆者がいちばんのハイローラーだったと思う。

この「ウイネマッカ競馬場」、筆者が訪問した2010年の土曜を例にすると、400ヤード戦はひとつだけ。「ダービー」がそのレースだが、3歳馬ではなく4歳馬を対象にしたものだった。本来の番組だと土曜に4歳馬たちで予選をする。土曜にダービーを行うことに少なかつたために土曜の一発勝負に。全馬が前年10月のフレスノ(カリフォルニア州のフェア競馬)以来

ツキーパンツを履いているのはプロかセミプロ、あとはジーンズを履いた「牧場従業員」的な騎手だ。勝つのはジョッキー・パンツ組がほとんど。きちんと調べてはいないが、ジョッキー・パンツ組はそのままカリフォルニアのフェア競馬などでも騎乗するのだと思つ。

この「ウイネマッカ競馬場」、筆者が訪れた翌年の2011年は馬ヘルペスウィルスの流行により中止になってしまった。2012年と13年は復活したようなのだが、その後はラバの競技会とともに廃止となってしまった。

いまウイネマッカについて検索しても、やはり競馬に関する情報は出ていない。これは大げさに言うと、一つの文化の終焉だと思う。ラバの使役が盛んだった開拓時代、19世紀の文化をいまに伝えるのがミュールレースだったはずで、その競馬場がひとつ無くなつたのは本当に悲しい。

ミュールのレースはカリフォルニアにはまだあるし、アメリカには他にペイントホースやアパルーサのレースもある。そういう「マイナー競馬」にはできるだけ長く存続してほしいものである。

競馬は土日とも行われるのだが、出走馬は共通。つまり、土曜も日曜も走る。オーストラリア人もびっくりの「連闘」だ。そのため、日曜の出馬表や結果表で前走欄を見るに、全馬が前日の「ンボルトベント」だのだと思う。実際、ワクベースの成績表などでは競馬場名は「ンボルトカウンティフェア」となっていた。カリフォルニア州にも同名のフェア競馬がありそちらでもミュールのレースが行われるのだが、これは偶然の一一致である。

「ラバまつり」は例年6月の上旬、土日の2日に跨って行われていた。イベントのメインは競馬というよりは乗馬(乗ラバ)の競技会で、朝から夕方までさまざまな種目が行われていた。ウェスタン乗馬のようにジムカーナを行うものもあれば、馬車競技もあった。馬車だけでも1頭立てから多頭立てまで何種目もあり、同じ人が何種目もエントリーしているとはいえない。ラバ競技にそこまでの競技人口があるのには驚いた。競馬の時

競走の形式は、クオーターホースと同じ直線短距離レース。350ヤード戦がほとんじて、「くまれ」の出馬表や結果表で前走欄を見ると、全馬が前日の「ンボルトカウンティフェア(HCF)」となっていた。アメリカには「エア競馬」と呼ばれる地元のお祭り的な競馬があるが、ウイネマッカはおそらくその特殊バターンで、特になにもない小さな町としては年に1回の大イベントだったのだと思う。実際、ワクベースの成績表などでは競馬

種で、使役動物として優れているためかつてアメリカでは19世紀末に220万頭もが飼育されていた。アメリカには「エア競馬」と呼ばれる地元のお祭り的な競馬があるが、ウイネマッカはおそらくその特殊バターンで、特になにもない小さな町としては年に1回の大イベントだったのだと思う。実際、ワクベースの成績表などでは競馬

間帯も内馬場に作られた角馬場では、競技会が蕭々と行われていた。競馬は土日とも行われるので、出走馬は共通。つまり、土曜も日曜も走る。オーストラリア人もびっくりの「連闘」だ。そのため、日曜の出馬表や結果表で前走欄を見ると、全馬が前日の「ンボルトベント」だのだと思う。実際、ワクベースの成績表などでは競馬

種で、使役動物として優れているためかつてアメリカでは19世紀末に220万頭もが飼育されていた。競馬は土日とも行われるのだが、出走馬は共通。つまり、土曜も日曜も走る。オーストラリア人もびっくりの「連闘」だ。そのため、日曜の出馬表や結果表で前走欄を見ると、全馬が前日の「ンボルトベント」だのだと思う。実際、ワクベースの成績表などでは競馬